

「人類の目覚め」

(昭和四十年 七月発行)

道の教で心が明らかになるならば、人は争いの世界を去つて、精神的の世界に生きることになる。精神的に働けば萬物もそれに連れて生きるのである。この世は神の世であるから自然の御力が充ち満ちて来れば総てが蘇るのである。この故に人の靈魂が目覚めなくては現世は現代を以て、萬事休す“というほかはない。

元々人は萬物の靈長として特に神の愛子として地上に生れ出で、生成化育の神にならつて利用・厚生之道を授かり、天地を無限に拓くために自由意志なるものを與えられている。これが人間の本来の在り方である。その自由意志を悪用し、乱用して私利私慾にふけり、自己愛に溺れ、他を憎み、怒り、妬み、怨んで、また負け惜しみ強く争っている。方向を転換して、宇宙真理に目覚め、宇宙大自然の御意のまま生命の道に進まなければ、大変なことになるのである。世相を見ると、大自然を征服したかのようにうそぶき、宇宙の神秘の扉を開き得たかのように吹聴しているが、慢心、無謀も甚だしいと言わざるを得ない。神の目から観給えば、無知暗愚といふのほかなく、人々を死出の山へ辿らせているものである。天地の理法に逆らえば、やがてはつまづき倒れることは火をみるよりも明らかである。